最後に本名 語ったのはなぜ？

なぜ、最後に本名を語ったのか―。1970年代の連続企業爆破事件に関与したとして指名手配されていた「東アジア反日武装戦線」の桐島聡元メンバーが昨年１月、神奈川県の入院先で本人であることを打ち明け、70歳で死亡した。半世紀の逃亡生活を描いた劇映画「『桐島です』」が、今月４日から京都市下京区の京都シネマで公開される。主演の俳優毎熊克哉さん(38)は「証言をつなぎ合わせて想像を膨らませ、役作りした」と語った。（藤松奈美）

主役の桐島元メンバーを演じた毎熊克哉さん。本名を名乗る場面の演技に最も頭を悩ませたという（大阪市淀川区・シアターセブン）

指名手配、偽名で逃亡半世紀
劇映画「桐島です」主演・毎熊克哉さん語る

困っている人助ける普通の人。勝利宣言か、贖罪か

元メンバーは県内の工務店で、偽名を使って住み込みで働いていたとされる。高橋伴明監督が史実と証言を元に物語風に仕上げた。

「手配書の罪名と笑顔にギャップがあり、幼い時から気になる存在だった」と毎熊さん。死亡の報を聞いた時は「生きていたんだ」と驚いたという。出演依頼を受け、務まるかどうかと戸惑ったが即決した。

事件に関する本を読み、当時を知る人に話を聞いて、時代の空気感や人物像を想像した。共通点があった。広島出身。田舎の港町から上京した時に受けた強烈なカルチャーショックを思い出した。

「正義感の強い青年が当時盛んだった運動に強く引かれ、純粋ゆえに突き進んでしまった。最初に出会ったのが違うものだったら…。彼の気持ちが理解できるような気がした」

ブルースが好きで、酒に酔って上機嫌で歌っていた。恋に落ちかけた女性がいた。そんな知人の証言から浮き上がる人物像は「道で困っている人がいたら助けてあげるような、普通の人だったのでは」。

正体を明かした真意は―。「桐島です」と名乗るせりふに悩んだ。最後は本人に戻りたかったのか。逃げ切ったという勝利宣言なのか。被害者や仲間に対する贖罪だったのか。考え抜いた末、感情を抑える演技を選んだ。「解釈は見た人に任せようと思った」

政治や社会に対し、若者の関心の熱量があの時代と大きく違う今だからこそ、この映画の存在価値はあると感じている。手段は否定されるべきだが、優しさのある社会を望んで犯した行動だった。「あるべき社会を考えるきっかけにしてほしい」と言葉に力を込めた。終映日未定。

考え抜き演技 解釈は見た人に

桐島元メンバーが、バーで出会った女性に恋心を抱くシーン。脚本は、知人の証言などを元に物語を構成したという＝「桐島です」の一場面から

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます